

イエスはガリラヤへ行かれる旅路の途中で、サマリアを通る道をあえて選んだことによって、ヤコブの井戸において、ご自分がメシアであることをサマリアの女性に初めて明らかにしました。さらに、弟子たちにも「霊の食べ物」が神の御心を行うことよって与えられることを明らかにしました。そして、サマリアに2日間滞在されたことで、メシア信仰のことを十分に知らないサマリアの人々がイエスの言葉と業を通して、神を信じる信仰へと導いたのでした。

そして、43節以下によると、サマリアでイエスがメシアであることが知れ渡った2日後、イエス一行はサマリアを出立してガリラヤへ向かったのです。ガリラヤに到着すると、ガリラヤの人々はイエスを歓迎したのです。ところが、44節にあるように、イエス自身は「預言者は自分の故郷では敬（うやま）われないものだ」とはつきり言っていたのに、それでも、あえて生まれ故郷であるガリラヤに赴いたのです。サマリアにしてもガリラヤにしても、本来イエスが行かれる場所ではないのです。サマリア人はユダヤ人とは敵対的な関係にありましたが、預言者は故郷では歓迎されない立場にあることを分かっていたにもかかわらず、主イエスはあえて自分が反発を受ける道を選んでいるのです。自分が尊ばれない場所に普通は誰も行きたくはないものです。でも、イエスはあえてそのような逆説的な道を選んでいくのです。

ところが意外なことに、ガリラヤの人々はイエスを歓迎しました。その理由は、過越し祭の際にエルサレムでイエスが行ったしるしをガリラヤの人々が目撃していたからです。ですから、ガリラヤの人々はイエスを歓迎したのでした。しかし、イエスが行った奇跡を見て、イエスを信じて、それは本当の信仰からは程遠いものだったのです。確かに、奇跡は神の支配が現実のものであることを誰の目にも明らかにさせるものですが、それは奇跡の業がすごいことだからではなく、イエスが神の恵みを目に見える形で明らかにさせたことで、神の支配が現実のものになっていることを象徴的に表している¹からです。

イエスは「神の国は近づいた。悔い改めて、福音を信じなさい」（マルコ1章15節）という言葉を告げて、公の活動に入りました。これは旧約聖書から続く終末思想の延長線にあつて、この地上において神の支配が実現することへの強い確信に基づいている。例えば、主イエスが教えた「主の祈り」には、「御国が来ますように。御心が行われますように、天におけるよう地上にも」（マタイ福音書6章10節）とあり、その強い期待感がうかがわれる。御心＝神の意志が地上において成就することが期待されているのです。これは、死んだら天国で楽しく暮らすというような類の思想ではなく、その中核には天地創造において神が確立した創造の秩序が再び、地上で機能するという期待なのです。この創造の秩序というのは、人種、社会階層、ジェンダーをも含む構造的な不平等や不条理に対して、新たな価値観をもって果敢に挑戦するものでした。イエスは、何らかの助けが神から来ることを待つという消極的な姿勢ではなく、最終的な正義の完成を見据えながら、イエスや弟子たち、さらにはイエスのことを信じる者すべてが、今の社会に積極的に働きかけて神の支配を実現させる手助けをしていくことを目指していたのです。

ですから、イエスの奇跡の業を見て驚嘆して、イエスの力を信じるような信仰的な姿勢から一歩突き進んで、神の支配を地上に実現していく意思を持つことが、イエスにとって望ましい信仰者の在り方だったのです。つまりは、イエスの弟子たちやイエスを信じる人々には、この地上に神の恵みが満ちる正義の状態が完成するように力を尽くしていくことが求められているのです。

さて、イエスはガリラヤのカナに行きます。カナはイエスが結婚式に招待された時、葡萄酒が足りなくなった際に水をぶどう酒に変えた場所です。そこに、ヘロデ王に仕える役人が息子の病気を治してほしいと頼みに来たのでした。この役人はカファルナウムにいたのですが、イエスがユダヤからガリラヤのカファルナウムまでやって来たのを聞きつけて、死にかかっていた息子を治してくださいと頼みまし

た。これに対してイエスは、「あなたがたは、しるしや不思議な業を見なければ、決して信じない」と少し突き放すように言います。それでも、この役人は食い下がります。この役人は、死にそうになっている息子を助きたい思いに駆られて、イエスのところに来たのでした。そして、この役人が「主よ、子供が死なないうちに、おいでください」と自宅まで来てくれるように依頼をします。イエスは「帰りなさい。あなたの息子は生きる」と言って安心させます。この役人はイエスの言われた「あなたの息子は生きる」という言葉を信じて帰って行きました。ところが、イエスが役人の家を目指して歩いていると、役人の僕たちが迎えに来て、その子が生きていることを告げたのです。息子の病気が良くなった時刻を尋ねると、僕たちは「昨日の午後1時に熱が下がりました」と告げたのです。

その時刻はイエスが「あなたの息子は生きる」と父親に告げた時刻でもあったのです。このイエスの言葉が癒しの力として働いたことをイエスは確認しているのですが、しかし、不思議なことにイエスは子供の熱が下がったことを知っていたにもかかわらず、役人の家へと行こうとされています。これは、イエスが子供を癒すただけに役人の家に向かっていたのではなく、この役人のその後のことを確認するために向かっていたのではないかと、予想させます。役人の息子の熱が下がって危篤状況から回復したイエスは確認したのですが、イエスはまだ一度も、その息子に直接会ってはいません。直接会わなくても、イエスの癒しの業は発揮されたのです。けれども、一度も会っていない息子が癒されたという事実は、天地創造において神が確立した創造の秩序が、この息子の上に現わされたことを示しています。御心が天におけるように地上でも行われますように、という主の祈りの実現でもあるのです。

そして、この役人は息子の熱が下がったことで、イエスを家へ招き入れる必要性は亡くなったのですが、僕を遣わしてイエスを迎えに行かせています。あとは、イエスがどのように判断されるかに任せているのです。イエスが他に緊急な用事があるならば、わざわざ自分の家に来なくても構わないという態度で、僕をイエスの許に遣わしています。聖書は、その後の詳しい状況のことは何も書いていません。ただ、イエスは神の支配が到来していることを、この役人の家に向かうことを通して具体的に現わしているのです。そこには、何らかの助けが神から来ることを待つという消極的な姿勢はなく、神の意志が実現する最終的な正義の完成を見据えながら、イエスの弟子たちが、今の社会に積極的に働きかけて神の支配を実現させる手助けをしていくことを目指しているのです。

イエスの弟子たちとは、キリスト者となった私たち一人ひとりのことです。イエスの弟子になろうとしている人も、そうです。この役人はイエスの「あなたの息子は生きる」という言葉を信じたのですが、本来の願いから見ると、イエスを自分の家にお連れしようとしても不思議はないのです。「あなたの息子は生きる」と言われても、いやいや、あなたをお連れするまでは信用できません、と言っても不思議はなかったのです。ところがこの役人は、イエスの「息子は生きる」という言葉を信じたのです。この時、この役人は「あなたがたは、しるしや不思議な業を見なければ、決して信じない」(48節)とイエスから言われたことを、真剣に受け止めて、見ないで信じる信仰へと招かれたのです。ヘブライ書11章1節に「信仰とは、望んでいる事柄を確信し、見えない事実を確認することです」とありますが、この役人は、望んでいる事柄を確信し、見えない事実を確認したので、イエスの言葉を信じて帰ることができたのです。イエスの弟子となるためには、見ないで信じる信仰へと信仰の内実を転換させていかなければなりません。見ないで信じる信仰とは、神にすべての状況を委ねる姿勢が必要となります。神に自らの苦難も悲しみもすべてを委ねる決断が、神の力を自らの人生に招き入れることにつながるのです。イエスは、すべての人に信仰と救いを得てほしいと、十字架の死から復活して、私たち一人ひとりに語り掛けてくださっているのです。

「あなたの息子は生きる」とイエスが言った背景には、この「見ないで信じる」信仰への招きの言葉なのです。奇跡を見て信じる信仰は、自分の願望を達成することに重点を置いた信仰姿勢です。そうではなく、見ないで信じる信仰とは、自分の苦難や悲しみをすべて神に委ねて、神と共に歩みだす信仰のことです。「あなたの息子は生きる」という言葉は、「あなたは神と共に生きる」と言い換えてもいい言葉なのです。「あなたは神と共に生きる」という言葉を受けて、私たちもこの一週を歩みだしていきたいと思います。